【解答例】

一

一　都市が、束縛からの解放や洗練された生活への希望を与えてくれるだけの、害のないものであるということ。

二　人間が機械や人工的な構造物によって自然を排除し、それによって人間自身が自然から距てられ自然の恩恵を受けられなくなったことが、都市化の本質であるということ。

三　自然に包まれながら大地を体で感じ、その恩恵を潜在的に受けとり続けることで、人間は自身の存在に対して確固たる信頼を抱いて生きていくことができるということ。

四　見知らぬ他人どうしの間にすら、互いの表情から生まれる目に見えない感情の交流があるのであり、それを否定して都市の合理性ばかりを追求することは、人間性の消失につながり、人間を物体化するに等しいと考えている。

五　都市化は、束縛や煩わしさからの解放と考えられがちだが、それは人間が身近な自然から受ける恩恵を享受できなくし、他人との交感を否定するようになることであって、人間存在の矮小化にもつながってしまうと考えている。

代々木ゼミナール

二

一

読書とは孤独に作品に向きあう行為だが、世界中の人々が読書していることを思うと、この世界に無数の静かな情動が永遠に息づいているように感じられるということ。

二

物語においては人間の実相が問題になるので、人間模様における社会的な序列や善悪は度外視されるということ。

三

物語を読むのは、読む行為そのものが楽しいからであり、たとえ効用がまったくなくても読むものなのに、読書の効用を具体的に答えるとそれが一人歩きして、読者には効用が必要であると誤解される危険性があるから。

四

言葉や思想は極限状況のなかでこそ生まれるものなのに、それを無視して戦争が起きたときに言葉や文学の無力さを議論しようとすることは思いあがりであり、安全な場所で事態を傍観するだけの卑劣な態度であるということ。

五

言葉や文学は、現実的な効用をもつものではなく、人間が自らの意志で感情や生命を育むための根源的な営みであり、どのような過酷な状況であっても不滅であるような、現状に抗い未来を創造する力をもっているということ。

三

一

あなたまでもお連れしてつらい目に遭わせ申しあげるようなことは、気の毒だと思い申しあげますから、私義経が先に陸奥へ下って、もし生き永らえましたなら、秋の頃にはきっと迎えの者をあなたの元に差しあげましょう。

二

人の命はいつどうなるかわからないものだから、北の方が先に死ぬようなことがあれば、一緒に陸奥へ下らなかったことを義経が後悔しても後の祭りだということ。

三

私に愛情があったときには、四国へともに逃れたのに、今回陸奥へ連れて行ってくれないとは、いつの間に夫は心変わりしたのかと、北の方が恨めしく思うということ。

四

予測しうる不穏な出来事をいくら並べ立てて訴えても、義経は強情だから聞く耳をもたないだろうということ。

五

夫がそれほど薄情ならば、私も夫と同じように心変わりすればよいのに、それでも私の気持ちは変わらないのだ。どうして薄情な夫のことがこんなにも恋しいのだろうか。

代々木ゼミナール